

## 教育の大切さを説いて回る

このような状況の中、哲太郎は保護者の理解を得るため、毎週日曜日になると、遠方の大安、日南、外埔にまで足を伸ばし学齢期の子どもがいる家や、入学したにもかかわらず家庭の事情などで休んでしまっている子どもを、一軒一軒訪ねて、教育の大切さや、尊さを説いて回りまわした。

これは、かつて哲太郎の教え子であった陳嘉瑜や黃並傳らが教師として大甲公学校に赴任してからも続けられました。

長年の地道な努力が実を結び、就



昭和期の大甲公学校の授業風景。この頃になると教室も子どもたちで埋め尽くされたようです

学児童もだんだんと増えていき、哲太郎が亡くなる大正13年（1924年）には138人の卒業生を送り出すに至りました。

昭和3年（1928年）の大甲公学校創立30周年祝典時に残された文章によると、日本の就学率は97.99%、台湾全土でおおよそ50%、大甲地方はおおよそ70%とあり、台湾全土の公学校の平均よりも20%高く、哲太郎たちの長年の努力の成果が垣間見えます。

## 生徒の行く末も案じた 一生の師としての哲太郎

公学校は、台湾総督府の制定した「台湾公学校規則」により、8教科の科目が決まっていました。

中でも国語、読書、作文、習字の4教科は1週間の授業時間の7割以上を占め、哲太郎が得意とした教科でもありました。

修身（今で言うところの道徳）は特にお手のもので、小さいころに学んだ四書五経で鍛えた感性や知識をフルに活用し、生徒たちの評判も上々でした。

貧しい家庭の生徒には、鉛筆や紙を与え、生徒が病気になるれば牛乳、菓子、絵本などを持参してお見舞い



大正12年発行の公学校用国語読本

子たちを我が子が帰って来たかのようにならなうに喜んでさうです。

大甲で開業医をした朱青松は、明治44年（1911年）に大甲公学校を卒業すると、大甲区から日本に留学した初めての学生として、京都の同志社中学に進学しました。その後、台湾に帰り、難関だった台湾総督府医学専門学校（現在の台湾大学医学部）に入学。大正13年（1924年）の卒業生23人の中でただ1人の台湾人でした。また大正8年（1919年）に卒業した吳墩禮は、その後、東京帝国大学（現在の東京大学）を卒業、北京大学の教授となりました。

一方、卒業生の就職紹介にも熱心でした。当時、公学校を卒業すればどこからでも引張りだこだったようですが、哲太郎は自身の心血を注いだ教え子を非常に大事にし、いい加減なところに就職させないよう奔走しました。同じところに2回、3回、多いときでは5回、6回と足を運んで交渉し教え子の将来を確保しました。

## 三宝を重んじ、最期まで

### 清貧精励の人だった

「自分は3つの宝を持っている。一つは慈悲、二は節儉、三は謙虚で

に行きました。あるときは、一人の生徒が足に釘が刺さり、赤くはれ上がっているため授業に出てこれないと聞くと、すぐさま生徒の家に行き、けがが治るまで生徒を背負って登校しました。哲太郎は毎月の給料の大半を生徒のために充て、学費の支援を受けた生徒は、開校してからの25年間で300人以上に及びました。

また、哲太郎は生徒の進路についても真剣に考え、できうる限りのサポートをし、優秀な生徒には進学や留学を勧めました。卒業生のうち台北師範学校や台中師範学校（現在は、いずれも国立や市立などの教育大学になっている）に入学する子も多く、卒業して大甲公学校の教師として着任し戻ってくることもありました。哲太郎はそうやって戻って来た教え